【海外レポート】

台湾サバティカル記

前田亜紀子

群馬大学教育学部

１．準備

羽田から台北まで約４時間、珍珠奶茶のブームで話題の観光都市である。親日家が多く、亜熱帯気候のほんわかとした環境のなか、2019 年９月から７ヶ月間のサバティカル途上での寄稿である。

群大教育学部の制度は 2013 年に復活し、年間２名、期間は前後期いずれかの半期（含長期休暇）、勤続５年以上 48 歳までが対象となっている。研修先は国内外を問わず、研修費ゼロのため自由度はあるが、渡航先によってはある程度の軍資金が必要であろう。不在中の授業は、半期に移動や次年度複学年開講などの対応が求められる。

台湾は３ヶ月のビザなし渡航ができる。他国への渡航後リセットされるため、今となっては、査証は無くてもよかった。必要性や種類は受入先での身分や期間で異なるため準備は早めがよい。申請は台北駐日経済文化代表処で行い、私は停留査証マルチプル（出入国可能）を取得した。

研修先の決定や課題の事前相談は極めて重要である。学会や本部会でのご縁を通じて、今回、文化学園大学田村照子先生の門下で学位を取得された陳素琴先生にご紹介頂いた。渡航前から現地でも親身にご対応下さり感謝の念に堪えない。

２．天主教輔仁大学織品服飾学院

輔大は、台北にある２か所の国際空港から地下鉄で１時間弱の新北市に位置する。12 学部、修士および博士課程、夜間部を要する私立総合大学に、学生数約 2.7 万人が在籍する。聖座直轄の台湾教会最高学府であり、前身の大陸では初の家政学部、織品服飾学院は台湾初の研究教育機関である。

研修を受け入れて下さった鄭静宜先生は、米国で学位を取得され、ご専門はファッション社会心理学である。共同で持続可能なファッションに関する台日大学生の意識調査を行っている。複数学位取得制度や海外インターンシッププログラムのため世界各国を飛び回っておいでである。

広大なキャンパスは南国情緒にあふれ、非常に安全である。附属病院、附属幼稚園、中華服飾文化博物館、３つの図書館、大講堂、陸上や野球などの競技場、プール、学生食堂、スーパー、コンビニ、郵便局、学生寮が揃っている。大学至近に宿舎を借り、食事、携帯電話、Wi-Fi 環境、現地通貨の調達など困ることがなかった。

輔大生は語学に長け、優秀勤勉である。輔大言語センター中国語クラスは定評があり、１ターム（３か月）受講した。様々な理由やバックグラウンドで学ぶ幅広い年齢層の仲間に出会えたことは、研修をさらに有意義なものとさせた。

やはり気をつけるべきは健康である。慣れた頃、胃腸炎に罹って輔大病院のお世話になった。11 月下旬からは、北部も冷涼となり風邪を引いた。病気の時は尚更だが、日頃から台湾人はなぜこんなにも優しいのだろうと感動を覚える。

３．国際学会への参加

９月下旬、第 14 回国際生理人類学会がシンガポール国立大学で行われ、共同研究発表として参加した。台湾から約４時間、１泊３日の弾丸日程であった。インドネシアの煙害（ヘイズ）の影響が懸念されたが、シンガポールはガイドブックの通り、街も空気もクリーンだった。

10 月初旬は、The 4th International Conference on Ambient Intelligence and Ergonomics in Asia が台湾桃園市にある元智大学で行われた。九州大学栃原裕先生のご師事で学位取得された、周金枚先生の所属先開催とあって、日本やアジア諸国から多数の参加者、門下生が集い成功裏に終わった。

12 月初旬には、輔大織品服飾学院主催の Orange Beneficence International Conference が開催された。Keynote speaker として中央大学の磯村和人先生による「持続可能な開発の問題に対する日本企業の取り組み」が紹介された。午後は分野別の中国語による研究発表会だが、要旨集は中英表記だった。

４．台湾繊維産業界を垣間見る

織品服飾学院の輔大生とともに、被服関連の行事に参加する機会を得た。10 月 7 ～ 9 日は南港国際展示場で開催された台北紡織展に足を運んだ。今年のテーマは、応用機能性、環境保全であり、輔大生就職先の企業ブースで説明を受けるなど、キャリア教育の一環となっているようであった。

台湾はスポーツ･アウトドア衣料市場が盛んなことで有名である。ナイキやアディダス、アンダーアーマーなどのブランドが台湾企業と協力して研究開発センターを設けている。また、スマート衣料の開発にも力を注いでおり、化学繊維の機能性は世界に誇れるものが多い。例えば、2018 年に行われたサッカーワールドカップのウェアとして、日本、ドイツ、モロッコ、エジプトなど 16 チームが made in 台湾を身につけた。また、2020 年東京五輪で採用された材料技術もあり、被服衛生学的観点から注目したい。

化繊の開発や生産は並行して、マイクロプラスチックによる海洋汚染など、環境保全と切り離せない。原料、紡績、織布から染色整理まで、循環型化繊への取り組みにおいても世界をリードしていくことで、持続可能なファッションを実現する台湾の繊維産業に期待が寄せられている。

10 月 28 日は、鄭先生、李玉蓮先生、ゼミ生４名とともに､台中にある緞帯王觀光工廠（リボンミュージアム）および財團法人鞋類運動休閒科技研發中心（Footwear & Recreation Technology Research Institute: FRT）を見学した。

リボンミュージアムは工場併設の一般開放エリア（見学、体験、購入）と商談フロアに分かれており、後者には世界ブランドのロゴ入り包装用や被服素材、リボン幅の一方の糸を引っ張るとあっという間に花になる特許リボンなど、全てが揃っているとのことだった。リボンの染色体験や小物製作、何万という種類の中から購入を楽しんだ。

FRT は、履物博物館、障がい者および高齢者用の補助器具や各種運動器具の研究所、フットウェアのデザイン技術研究所など、履物全般の総合施設になっている。また、障がい者雇用機関として政府認可の職業訓練所でもある。スポーツウェア同様、台湾製フットウェアの生産量は世界最大とされる。ゼミ生は高齢者の介護福祉領域における被服製品開発に関する研究に取り組んでおり、説明や体験で積極的に質問していた。

５．中華服飾文化博物館（Chinese Textiles and Clothing Culture Center: CTCCC）

台湾先住民族、漢族、および少数民族の伝統的な織物や衣類 10,220 点のコレクションを有する。博物館学研究大学院では、台湾やアジア太平洋地域、世界中の美術館や文化産業で活躍する専門的な人材を育成しており、CTCCC はそのインターンシップ先の一つである。

12 月２日から被子：喜幛被面特展（婚礼用寝具キルト展）が開催され､オープニングセレモニーに出席した。光沢のある美しい紅色の絹地に、縁起の良い花鳥刺繍が施された被子（キルト）を布団カバーに縫い付け寝室を設える。結婚というライフイベントに対する女性の期待や生活美として取り入れていた台湾文化の一端を感じる展覧会であった。展示の一部は HP で見ることができる。

終了後には特別に、収蔵庫の漢服や苗族の刺繍、チャイナドレス（約 3,000 点）の一部を高輔霖先生から解説頂いた。作品一つ一つの背景が目に浮かぶよう、Story を Memory し Collection しているという言葉が印象的であった。来年開催予定というチャイナドレス展に再訪したい。

６．最後に

台湾の別称はフォルモサ（Formosa：麗しの島､中国語で美麗島）である。帰国が近づくにつれ、台湾の生活や文化をより深く感じたい､環島（ファンタオ＝本島一周）の旅ができたらと夢見ている。

７．参考ホームページ

天主教輔仁大学：http://www.fju.edu.tw/
中華服飾文化博物館：http://ctccc.tc.fju.edu.tw/
緞帯王觀光工廠：
https://www.ribbon888.com/index.asp
財團法人鞋類運動休閒科技研發中心：
https://www.bestmotion.com/
台湾光華画報雑誌社：
https://www.taiwan-panorama.com.tw/Index_ja.html

＜連絡先＞
〒371-0027
群馬県前橋市荒牧町 4-2 群馬大学教育学部
前田 亜紀子
電話＆FAX：027-220-7344
e-mail：akikomaeda@gunma-u.ac.jp